
緋弾の...なんだっけ？

亜麻宮 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾の…なんだっけ？

【Nコード】

N2894Z

【作者名】

亜麻宮 巧

【あらすじ】

ATG (After disconnecting the strongest glasses) 「メガネを外したら最強」という変な能力を持つ主人公（転装生）の少女が、武偵中から始まる話です。

*この作品の主人公は非転生、非トリップです。

ちょっとあらすじかえました。 12 / 10

1話(前書き)

投稿!

1話

俺は今、武偵中の人試を受けていた。強襲科の。高校と同じ感じらしい。

俺にはふざけた力があつた。メガネを外すと、一般人の70倍とゆうふざけた力があつた。

だけど俺は使えない、モテモテ+女性を口説くと言つふざけた特典もついてくるのだ。

だが普通に目が悪い。発動中に目を閉じれば未来の映像が見えてくるので結果問題なしなんだが、最高発動時間は5時間。これをすぎると一日中高熱が起きる。

一応言つておくが俺：女だぜ？ざけんな、この力のせいで何人口説いてきたか、地味にとんとんと悪と戦いたいんですよ。

ま、転装生目指すし。

ちなみに俺はこの能力のことを、ATG (After disc
onnecting the strongest glasses
s)と読んでるつまり「メガネを外したら最強」である。

合格ギリギリを目指して行く。

とするとバッテリー教官が「虐めですか？これ。」

仕方なくホルダーから、M1911を取りだし教官もとい、彼の横を打つ、

「どこを打っている」

「あなたの背中です！」

俺が打った弾は、壁に反射し、教官のあばら骨の上から2本目にヒットする。

うつし、教官倒したし、もう一人倒せばオツケーかな？

そんな事考えてる間に一人こっちに来た。

静かに彼は銃を構えようとしている。後ろから。

ちなみに今はメガネをバッチリつけている。
メガネ付けていてもAランクはあると思う。
母さんにしごかれてきたからな・・・。

同じく彼にも当たるように、もう片方からP228を出し、一弾は壁に、もう一弾はその弾かれたやつに当たるよう計算する。
そうすると彼の頭の真横を通って頬に一筋の切れ目ができ、血がたれ気絶する。

「さつて、誰かにさつさと負けるか」

何となく敵を探して……。

残念なことが起きた。

反射的に撃ってしまった。

相手はK。

「え〜〜」

俺の叫びはこの塔にさぞかし響いたことだろう。

結果：合格、Aランクで。

「あ〜ら、良かったじゃない一葉」

と、のんきに言っているのが俺の母、西条百合その人だ。この人はメガネを外すと性格が変わり、超強くなるのだ

「まあ、Bだから目立たないだろうし、教務科から転装生見とめられたし」

んで、一つ問題がある、何故か俺の行く寮が3年と同じ部屋なのだ。

まあ、ばれなきゃいつか。

入学式まで後、一ヶ月。

「どんな人かな？」

2話

男子寮、とある一室にて。
ピンポン。

「はい」

…出てきたのは、武偵高女子制服を着た美術品のような、美少女。
「……遠山金一さんの部屋と思ったんですが、間違えたようです、すみません」

ドアを閉めようとする……あれ？止められた。

「間違つてません、俺が金一です」

ま、まさかの女装癖!?

「いや、女装癖じゃないから、用があるんだろ？」

「え〜と、なんかですね？部屋分けのさいに何故かここになったんですよ、俺」

「教務課から連絡がきてたけどキミだったのか」

「ええ、はい。多分俺です」

それで中に入れてもらった。

「はい、これルームキー」

「ありがとうございます。ところで、あの格好は？」

現在は普通な私服だが、さっきのは…

「…キミがルームメイトならいつか」

と、話し始めてくれた。

ヒステリア・サヴァン・シンドロームという、なんかややっこしい病気で、人によって違うらしいが、彼の場合は女装することらしい。それを使った後は、極度な睡魔がくるらしい。

「大変な、病気ですね、さぞかし略称ではHSSですね」

「たしかに、そうともいえるな」

「全く関係ないですが、ちょっと先輩に化粧させてもらっていいで

すか？」

誰かに化粧をさせる、それが俺の趣味だ。

「いつかね」

ちつきしょー。めっちゃ楽しそうだったのに。ズーン。

「キミはその前髪がうっとうしくないのかい？」

「？一応、後々めんどくさそうなので言っておきますけど俺転装生なんで、目くらい隠しとこうかな」と

「！ほ、ほ、本当なのか？あまりにも男っぽい口調で、そんなしぐさだったから分からなかった」

「ごまかせてたんだ…」

「ま、それはともかく自己紹介でもしますか、俺は西条一葉、アラシク、ついでに転装生、これからよろしくお願
いします」

「俺は、遠山金一、よろしく」

…取り合えず話をしておくか。

「先輩、一つ聞いてもらえますか？」

「何をだ？」

「実は：俺、ふざけた病気があるんですよ、After disc
o n n e c t i n g t h e s t r o n g e s t g l a s s e
s 通称ATG、つまりメ

ガネを外すと身体能力および、脳が活発化され、著しく強くなつて
しまふ病気です」

「本当か！」

本日二度目の本当と言う言葉をききました。

「はい。その代わり一定時間を過ぎると1日中高熱がでると視界に
入った女性をく、口説いてしまつと言うリスク
がついてきますけど」

金一さんが、肩を掴んで、

「今度、戦つてくれるかい？」

「本気じゃないといけませんよね？」

「あゝ」

2話（後書き）

金一さんってこんなんでいいんすかね？

3話

少し離れた、空き地島。

そんな、吹く風が気持ちい所では、めっちゃくちゃ緊張するような空気が流れている。

金一さんはカナモード（後で聞いた）ではない。

今の装備は、武偵中の防弾制服。M1911。P228

「さあ、始めようか」

「はい。でも、通常がどれほど通用するかためさせてください」

「いいだろう」

俺は、前髪を全体的に後ろにもっていき、ゴムで縛る。

「この、コインが落ちたらでいいですよね？」

「okだ」

俺は、コインを親指でピンツと弾く。

ゆっくりとコインが落ちる。

チンツ

すると弾丸がこちらに向けて一直線に飛んでくる。

だが、これくらいなら今の俺でも避けられる。

俺は、反撃にでる。

M1911をホルスターから早撃ちの要領で打つ。

金一さんは、若干指を動かすと右前方が光る。

「っ、早うちか！」

俺の打った弾丸は大きく右にそれ、コンクリートの地面に当たる。

だが金一さんの弾丸はこちらに着実に向かってきて、ヒットする。

「グッ！」

これが防弾制服じゃなかったら死んでいた。

「そろそろ、メガネを外したらどうだ？」

と余裕の表情、現に一步も動かせていない。

「お言葉にあまえさせていただきます。それと後悔をしないでくだ

さい」

ゆっくりと俺はメガネを外す。

すると、金一さんは驚いた表情をする。

そして、状況は一辺する。

そんな小さな油断を俺は見逃さない。

実を言うと、俺は超偵に近い。

通常では使えないがメガネを外すと使える、2つを。

一つは、氷を操る能力G35。もう一つは――

「イメージ、構築」

私の手には、一振りの刀があった。

そう、もう一つは、イメージした物を作り上げる、武器限定でG

45。

この状態になると勝手に自分の一人称が私になる。

人とは思えないスピードで金一さんの後ろに回りこみ刃を返しなが
ら斬る。

故に倒れる程度。

「チエックメイトです。金一さん」

眉間の間に銃口をあてる。

「まいった。そしてどいてくれないか？」

金一さんは顔を赤くしながら言う。

現在、倒れている金一さんの腹の上に私が乗っている状況。

中一と中三だがこの状況はまずいだろう。

「すみません」

ゆっくりと立ち上がりながらメガネを掛ける。

その後、金一がその夜眠れなかったのは別の話である。

4話

翌日。

なんだか金一さんの様子が変だ。

落ち着きが無いというか、そわそわしてるというか。

「どうかしましたか？」

「い、いやなんでもない」

そして何か歯切れがものすごく悪い。

今はかなーリ普通の私服（男物）で銃のメンテをしている。

「今日何か用事ある？」

「いいえ特に、しいて言えば学園島の探索ですか」

「それなら、俺が案内してやろうか？」

「別にいいです。ちよつと家に帰ったりするんで」

…あれ？なんか落ち込んでね？

なんだったんだろう？

1ヶ月後。

かつたるい入学式が終わり、部屋に戻る途中だった。

「ちよつといいかな？」

見知らぬ少年に声をかけられた。

「僕は、探偵科1年美星大河だ。キミに聞きたい事がある」

推定身長、この歳では平均的以上な165程度（俺は155）の
いかにもインドア派みたいな奴が声をかけてきた。

「なんだ？」

「キミは1ヶ月前に、3年の遠山金一さんとバトった人を知ってる
かい？」

「いんや、しらねえ」

「そうか…いったい誰なんだろう。遠山金一さんを降参させたと言
う武偵は…」

「?そんな噂があるのかい?まあ、どうでもいいけど」

…マジで?そんな噂がたちやっていたのかよ…確かに俺だけだ。

「んで、キミは何でそんな人を探しているんだい?」

「僕はその人を探して、チームを組む!」

「なぜに?」

「だって、強い人いたほうが絶対今後の任務とか楽そうだし、それに……」

「それに?」

「び、美少女だったらしい。ぜひ見てみたいと思ってな」

顔を紅潮させながら言う。

シャイなのかこいつ。

「フーことでしらねえ。んじゃーな、根暗そうな顔した地味やるー。取り合えずその外見でそんなこと聞かれたら

誰でも気持ち悪がる。取り合えず髪をきつたり、メガネやめたりしろ。そうすりゃもうすこしは何かを聞く事ができるかも知れないぜ」

「何故、僕に声をかけられただけで避けられると分かった!確かにそうなんだけどさ……」

「…もつかえっていいか?」

「ん、ああ。ありがとっ、キミの助言にちよっぴり感謝しよう」

? 取り合えず今日の昼飯何にすっかな?

5話

翌日。

「おはよう」

と昨日声をかけられた奴の音がする。

ふと後ろを振り返ると、

「誰？」

この歳からするとちよつぱり大きめな、紙はシヨートでいかにもスポーツできますと言われそうな感じの奴が声をかけて聞いた。

「僕だ。美星大河だ。君の言われたとおり、髪を切つたり、コンタクトにしたらむしろ逆に声をかけられるようになったよ」

「マジで？ほんとに同一人物？」

俺には信じられない。

「ああ。キミには感謝しよう。そして一緒にパーティを組んでくれないか？」

「めんどい、パス。そして死ねイケメン野郎」

「ふつ。諦めるものか。取り合えず名前だけでも教えてもらおうk
- - -」

右ストレートを喰らわせる。

そして教室に向かう。

「仮にも武偵ならそんなくらい自分で調べろ、探偵科ならなおさらな」

今日は初クエスト。教務科に向かい女として活動。

依頼は、港の密輸ルートの廃止および犯人の逮捕。ランクA。

そして何故か金一さんが一緒。

ちなみに私の格好は白いフードで目元まで隠れるような全身白づくめ。目は常に閉じながらいる。

「金一さん、こんなクエスト一人でできますよ。しかも俺の強さ知っているでしょう」

何か『ギクツ』という幻聴が聞えた。

「別にいいじゃないか、同じルームメイトの初クエストに参加したって」

「なんですかその言い訳は」

「気にしないで、さあ行こう」

現場に向かう。

すると現場では、ふざけた黒いスーツを着たヤクザと思しき人影が。

取り合えず私の特技その一『声まね』でこう言う。

『ウ〜〜』

「ちっ、警察か！」

まずはその声を出しながら、録音しておいたボイスレコーダーで、

『お前達は完全に包囲されている。大人しく出てきなさい』

とワンパターンな説明をいう。

「ずらかるぞ、お前たち！」

ヤクザどもは倉庫の中の謎の穴に入っていく。

私はM1911を構えながらついていく。

弾は殺傷能力の無いゴム弾。

背後から撃つ相手が、拳銃で反撃しようなんてお見通しなので素早く接近。

首に手刀をいれ気絶させて、手錠で両手を固定。

結果、ヤクザ28人を逮捕。

クエストが終わり、自室に戻る。

「俺の出番は？」

6話

とんとん拍子で話が流れるのは早く今は夏休み、そして実家の西条家の入り口にいる。

『お帰りなさいませ、お嬢様』

と執事&メイド総勢20名ほどのお出迎えである。

つまり一葉はいいところ育ちのお嬢様だったりする。

「ただいま、みんな」

今はメガネをつけた状態だが極端に優しい声になってしまつ。

「今、母さんは何処に？」

「現在は自室にてデザインを考えていらっしやいます」

「ありがとうございます、三橋」

三橋（三橋 啓吾）は俺の専属の執事だったりもする。

俺は母さんの所に向かう。

「母さんいる〜？」

「はいはい居ますよ〜。一葉よくこの仕事する気になったわね」

仕事というのは、母の経営しているファッション誌のモデルと個人で経営している音楽会社のレコーディング。

母の方は武偵としてのクエスト（E 1.0単位）自分のは、会社の歌手として。

「取り合えずちゃちゃっと撮影すませちゃおうかしら」

「そうだね」

執事に車に乗せられて、母の会社の撮影室に向かう。

「おっと、その前に着替えてもらおうかな」

「了解」

変更、メイクルームに向かう。

徐々にカツラを取ると今までは肩にかかるかかからないかぐらいだったのが腰の辺りまでの綺麗な銀色の髪が出てくる。

「ちよっといたんでるかな？」

メガネを外し、自分で薄いメイクをして白いかわいらしいフリルのついたワンピースを着る。

自分でいうのは何だがさまになっていると思いたい。

「母さん。終わったよ」

母の前まで行くと抱きつかれた。

「やっぱかわいい、自分の娘だとしても食べちゃいたい」

ヤバイ、母さんが暴走してきた。

「ストップ。ささつと終わらせようよ」

その後、何着か着替えながら無事に撮影は終わった。

撮影された本は『忙しい武偵にも分かる今時のファッション』だ
そうだ。

これに乗っているのは全員現役武偵だ。

「次々」

今は自分が小5の時に母に我が儘を言って立てた会社だ。

「さつとはじめちやうか、三橋」

私がボーカル、三橋がギター。グループ名『124』

これは単に私の誕生日が12月24日だからである。

何故か、PVまで取る事になり終わったのは夜の7時頃。

初のCDがなぜPVまで？

社員に聞くと、

「絶対にヒットするから」

だそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2894z/>

緋弾の...なんだっけ？

2011年12月12日00時54分発行